

特集にあたって

医療の発展や、看護学の学問的深化により、専門性の高い看護が必要とされています。特に、先天性の疾患をもった子どもや医療的ケアが必要な子どもの長期生存が可能になったことにより、疾患や子どもの状態に合わせた個別性が高く複雑な看護技術が求められるようになってきました。その一方で、少子化により小児科単科ではなく、小児科混合の病棟が増えている現状もあり、普段は大人の看護をしている看護師が、子どもの看護をする機会も増えています。そこで、本特集号では「小児看護技術の基本」に焦点をあてることにしました。子どもの発達年齢や疾患に特化した専門性の高い技術ではなく、子どもにかかわった経験が少ない看護師や、小児科に配属された1年目の看護師、さらに小児科で実習する学生に参考になる「小児看護技術の導入の1冊」となるような指南書をめざしました。

本誌『小児看護』で技術の基本を取り上げるのは17年ぶりのこととなります。この間に医療機器が進歩したり、感染予防の考え方が変化してきました。例えば、筆者が看護師1年目だった20年前は、撮子を用いて鼻腔内吸引を行い、吸引チューブは1日1本を消毒して使っていました。現在は、ディスポーザブルグローブを用いて行い、チューブは毎回使い捨てです。このように鼻腔内吸引の技術一つをとっても、この20年で変化してきました。また、かつては経験の積み重ねを根拠に行われてきた看護技術も、現在では研究結果を根拠とした evidence based になってきました。evidence based になったことで、統一した看護が行いやすくなり、また医師などの他職種に説明できる技

術になりました。また今回は「技術」そのものに焦点あて、小児看護技術を身につける“はじめの一步”としてわかりやすい基礎的な内容に絞りました。執筆は、臨床で指導的立場にある小児看護専門看護師や認定看護師、さらに大学で看護学生の実習指導をされている教員にお願いし、あくまでも「技術」に焦点をあて、正しい手順と根拠について書いてくださるよう依頼しました。

さらに、子どもに看護技術を提供する際に、子どもをひとりの人として理解し、子どもの権利を尊重しながら、子どもとの援助関係を築くことが大切であることをふまえ、本特集では、最初に「コミュニケーションに関する看護技術」をとりあげました。次に子どもの状態をアセスメントするための「観察と測定に関する看護技術」、さらに子どもが発達過程で獲得していく「日常生活に関する看護技術」に焦点をあてました。なぜなら、それぞれの子どもに適した技術を提供するためには、その子どもに適したかかわり方や子どもの状態の把握、さらには日常生活行動の獲得状況などを基礎的な情報として捉えることが必要と考えたためです。本特集の知識を基盤にして、より専門分化した小児看護技術が発展することを願っています。

本企画に対して、こころよく賛同していただき、多忙のなか執筆くださいました皆様に深謝いたします。

小川純子 Ogawa Junko
淑徳大学看護栄養学部准教授